おわりに

今回、イタリアで約 40 年前から実践されているフル・インクルーシブ教育を中心とした人々の暮らしを見聞してきました。

日本とイタリアのインクルーシブ教育の違いについて本書の中でも述べていますが、日本のインクルーシブ教育では子どもの状態に応じて教育を受ける場所を選択することができ、イタリアのフル・インクルーシブ教育では住み慣れた地域で教育を受けることができるという違いがあります。

インクルーシブ教育については、ほかにも違いがあるため、派遣団員のなかでも帰国後の振り返りを含め両国の制度の違いについて議論を重ねてきました。

そのなかで、それぞれの制度に良さがあり、一方でどちらも完璧な制度ではないということを理解しましたが、結果として、「どちらが良い制度なのか？」という点について言及することは、非常に難しい問題であると感じています。ただ、イタリアのフル・インクルーシブ教育を目の当たりにし、「日本のインクルーシブ教育のあり方はこのままで良いのだろうか？」という疑問を感じました。

そのため、私たちはイタリアでの体験を振り返り、日本のインクルーシブ教育が当たり前の制度ではないという気づきや関心を向けるきっかけの一つになることを願い、私たちの体験記を出版することにしました。

イタリアを訪問した派遣団員は、日頃関わる対象者や立場がそれぞれ異なっていますが、おそらくほとんどの団員が「イタリア社会の根底にある全ての人を包み込もうとするインクルージョンな視点」について、派遣を通して感じたのではないかと思います。

団員たちが感じたインクルージョンな視点については、本書で紹介している視察先の取り組み、障害のある人の暮らし、イタリア人の声など、それぞれが担当した原稿の中に込められています。

ただ、あえてこの場で一つ強調して伝えるとすれば、イタリアでは、障害のある人だけが特別視されているのではなく、障害のある人をはじめとする全ての人々に様々な権利が保障されるべきであるという考え方が存在しているということです。この考え方が根底にあることによって、イタリアではフル・インクルーシブ教育をはじめとする様々な制度が、全ての人々にとってより良いものになることを目指していることを感じました。

現在、日本では、共生社会の実現に向けた取り組みが実践されつつあります。共生社会とは、子どもも、高齢者も、障害のある人もない人も、働いている人も働いていない人も、様々な状況や状態にある全ての人々が、お互いの人権や尊厳を大切にしながら支え合い、共に生きていく社会です。

この日本が実現しようとしている共生社会とは、まさに「イタリア社会の根底にある全ての人を包み込もうとするインクルージョンな視点」に共通する理念だと思っています。この全ての人を包み込もうとするインクルージョンな視点が多くの人に伝わり、日頃から関わっている人や自身の生活の中に取り入れてもらうことが私たちのもう一つの願いでもあります。

日本のインクルーシブ教育がより良く発展し、インクルージョンな視点を持った人や制度が増え、全ての人々にとって暮らしやすい共生社会になることを期待しています。

本書の出版に際し、クラウドファンディングによる支援と IYEO チャレンジファンドによる助成を受けております。また、私たちが参加させていただいた地域コアリーダープログラムの関係者の皆様、そして出版を快諾してくださったあけび書房様をはじめ、多くの方々のご支援をいただきましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

（中村 篤）